



「輝いている」

ホームから降りた私たちが見たものは会社帰りの人 家路を急ぐ人 そんな何も変わらない日常 そこにある紛れもない何も変わらない日常 少し戸惑ってしまっただ私は三日前に見上げた銀の時計を見た 『どんな時間が お前に流れたのか?』と 『まるで夢のような そんな時間だった』と 行きよりも 少し重くなったカバンを 持ち直しそう答えた みんなと別れ 一人になり 少しくつ何もう変わらない 日常に戻っていく自分が さみしく感じた 何もなかったように 夢のように 思える自分がさみしく 感じた

しかし過ぎ去った時間が こんなにも いとおしく思えるのは その時間が私たちにとって 一生消えることがない 共有された時間となって 輝いているからではないか



修学旅行 6月8日~10日

